

金沢市卯辰山山麓寺院群の樹林

鏑 隆 弘

1. はじめに

平成16年から17年にかけて、金沢市卯辰山山麓寺院群区域伝統的建造物群保存対策調査が実施された。この区域は、藩制期に形成された小立野、寺町とならぶ3地区の寺院群のひとつである。この区域の多くの寺院が境内や墓地に樹林を持っており、建造物の調査と並行して樹林に対する調査が実施された。この調査報告書では、区域の樹林や境内の樹木は、建造物群の背景を構成する重要な景観要素として位置づけられ、旧来の景観を保全する方針の中では、樹林も建造物同様に保全されるべきであることが示された。近年のモータリゼーションによる境内や墓地の駐車場化や、寺院経営のための墓地整備により、樹林地は減少する傾向を見せている。その一方で、住職の不在などで管理の手薄な寺院では墓地を中心に樹木の繁茂する様相も見られる。ここでは、この区域の樹林が、景観的な機能のほか環境保全、防災、レクリエーションなどの機能を持つ都市の中の緑地であることに注目し、その現況と将来形について検討する。

2. 樹林の広がり

調査では、この地域にある34の社寺のうち樹林の形成の見られる15のものを対象に、現地において相観植生および林床の様子について観察し、樹林内の代表的な樹木の大きさの測定を行った。また樹林の生育範囲について航空写真からの判読および現地踏査による確認を行った。調査を行った寺院と樹林の生育範囲を表2-1および図2-1に示す。

この平面図に見られるように、樹林は面的に広がるものと帯状に広がるものの二つのタイプが見られる。地域内での生育範囲の連続性は強いものとはい

えない。昭和20年代の航空写真では、寺院群の本堂を除いて地域のほとんどが樹冠で覆われている。現在の状態は当時から比べると大きく緑量を減らし、断片化している。しかしながら、現地における目線での眺めにおいては、背後の卯辰山の樹林地やそれぞれの緑が重なることで一連の大きなボリュームとして見えており、緑の多い印象を与える景観を形成している。

3. 樹林の自然性

調査した樹林のうち、①東山蓮如堂、②宝泉寺、③広昌寺、⑤西養寺、⑧龍国寺、⑩心蓮社のものが面的な広がりを持ち、比較的自然性の高い様相を呈している。タブノキやケヤキの高木の下にヤブツバキやシロダモ、モチノキなどが生育し、群度に差はあるものの地域の極相である常緑広葉樹林の要素を備えている。⑤西養寺の墓地に形成された樹林の様相からは遷移の過程を見ることができる。この樹林は山麓斜面に大きな広がりを持ち、地域における中心的な樹林のボリュームを形成している。大部分は常緑広葉樹林の様相を呈しているが、尾根部分には常緑広葉樹に混じって、植生遷移の前段階であるイヌシデなどの落葉広葉樹種の大きな樹木が見られる。この場所が17世紀に造成され、墓石の設置できる植生であったことを勘案すると、現状のように根が密に張った常緑広葉樹林が以前から生育していたとは考えにくい。以前は薪炭林の種がまばらに生育するような明るい落葉広葉樹林あるいはアカマツと落葉広葉樹の混交林であったことが見て取れる。西養寺に限らず、現状で墓地に広がる常緑広葉樹の林は、寺院の設立時においては落葉広葉樹林が広がっていたと考えられる。

表2-1 調査対象寺院

番号	寺院名
①	東山蓮如堂
②	宝泉寺
③	広昌寺
④	蓮昌寺
⑤	西養寺
⑥	妙応寺
⑦	妙泰寺
⑧	龍国寺
⑨	三宝寺
⑩	本光寺
⑪	全性寺
⑫	蓮覚寺
⑬	心蓮社
⑭	光覚寺
⑮	善導寺

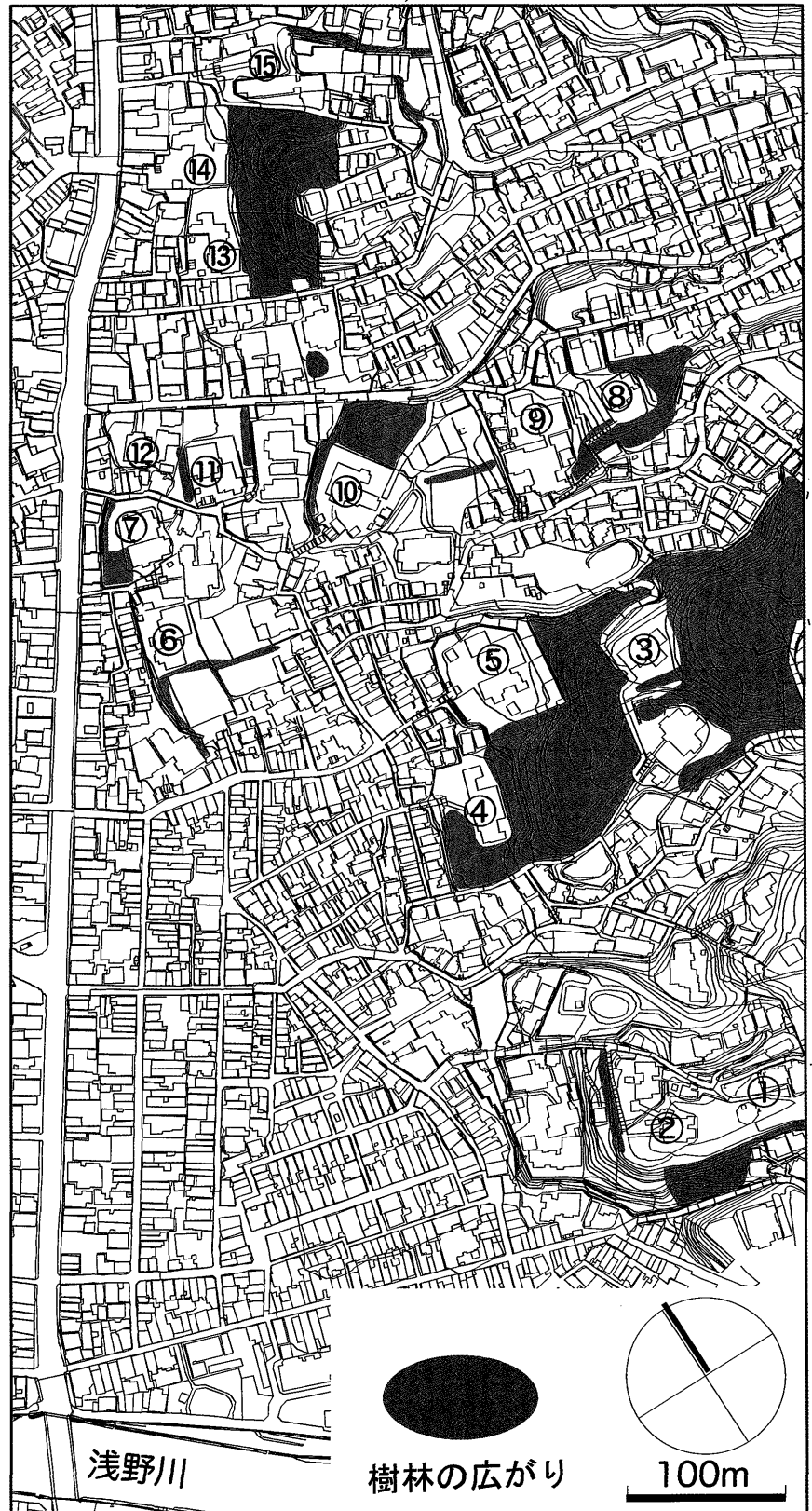


図2-1 寺社の樹木及び樹林の生育範囲

帯状タイプのもは、高木を中心に地被植生までが生育する幅5m以下の樹林である。帯状に生育しており、地域では大きな面積を占めるものではない。寺院同士の境界や、敷地境界付近の斜面地に生育しており、この地域に特有の樹林形態といえる。敷地内の樹林を伐開し墓地などを広げる際、曖昧であった境界付近や、造成的に難しい斜面地の植生がそのまま残ったものである。寺院の敷地に余裕があることで残されたとも考えられる。地形および寺院という土地利用が作った特徴的な樹林といえることができる。これらは手を付けられずにあることから、自然的な様相を呈している。構成種は面的に広がるタイプの樹林の自然性の高いものときほど差がなく、厚みは小さいものの周囲がコンクリートなどで固められずに、周辺に土壌表層が広がっていれば、将来的には樹林として広がるものである。

4. 寺院の樹林の現況

以下にそれぞれの樹林の特徴を述べる。

① 東山蓮如堂

敷地南側の斜面に、ケヤキ、タブノキを中心とした高木樹林が生育する。高さは16～18mである。中低木層にはヤブツバキ、アオキ、ヤツデが生育する。地被にはササの侵入が見られる。比較的急な斜面であり人為利用されにくい場所であることから、ササの侵入が抑えられ、現状のような実生、幼木の生育環境が守られれば、将来的にも樹林としての様相が保たれると予測される。

② 宝泉寺

敷地内には西側の敷地境界付近の斜面地と、南側の斜面地に樹林が生育している。これらは金沢市の保存樹林に指定されている。

敷地西側にはクロマツ、ケヤキ、エノキ、ソメイヨシノが、高さ16～20mの帯状に広がる高木林を形成している。中木層はない。低木層には、タブノキの幼木が数本生育しているのが見られる。地表には隣接する竹林からの落葉がたまり、種子の土壌への着



図4-1 ②宝泉寺西側樹林



図4-2 東山ひがしから見た②宝泉寺西側樹林

床が妨げられることに加え、暗い緑陰の状況により、草本などの生育はほとんどない。将来的にはタブノキが優占する林となると思われる。

南側の斜面は、モミノキ、スダジイ、タブノキ、モチノキを中心とした高さ17～20mの常緑樹林である。東山蓮如堂の樹林地と連続しており、人手が入っていない様相が見られる。中低木層にはヤブツバキが繁茂し、シロダモ、アオキの実生も多い。腐葉土が厚く積もり、地被に草本は見られないが、斜面下部の林縁からササの侵入が見られる。また、林縁部分には、大きく成長する樹種としてエノキの幼木が生育している。この部分は、将来においても現状の植生の様相を呈することが予測できる。

③ 広昌寺

敷地東側境界沿いを中心に、ウラジロガシ、タブノキを中心とした高木が生育する。高さは、16～18m

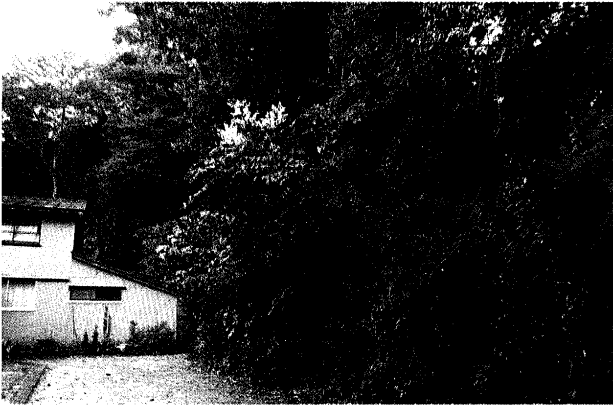


図4-3 ③広昌寺樹林

あり、幹周は2.5mの大きなものも見られる。中木層以下には常緑広葉樹林の構成種の生育が見られ、今後は、常緑広葉樹林としての様相を維持すると見られる。

④ 蓮昌寺

本堂西側の前庭部分に落葉樹が多く生育し、樹林を形成している。大きなものはケヤキであり、高さは15～20mある。林床は境内として手入れされており、植生はまばらである。高木による緑被率が高いこともあり保存樹林に指定されている。

⑤ 西養寺

本堂背後の卯辰山斜面に広がる墓地にケヤキ、タブノキを中心とした高木林が形成されている。高木層の高さは15～20mである。中木層は顕著ではないが、低木層にはヤブツバキ、シロダモ、草本層にはこれらの実生の生育が見られる。保存樹林に指定されている。

樹林地の広がる墓地は地形的には尾根、西斜面および南斜面からなる。尾根部分とその他の斜面部分では植生の様相は若干異なる様子を見せている。尾根部分では一般的に尾根地形上に生育するアカマツ林の構成種であるイヌシデ、ヤマザクラがみられる。ここでは、常緑針葉樹であるカヤの大木とそれから落ちて生育する多くの実生が見られる。尾根の周りの斜面地では、上記の種は見られず、ケヤキ、タブノキを中心に、ウラジログシ、ヤブツバキ、シロダ



図4-4 ⑤西養寺樹林内の眺め



図4-5 ⑤西養寺樹林尾根部林床の様子

モが高木および低木、草本層に生育する。斜面の急な部分では墓は設置されておらず、これらの種による鬱蒼とした樹林となっている。大木で珍しいものとしてケンボナシが生育する。

林縁部分ではカラスザンショウ、エノキが生育しており、この部分においても人手のあまり入っていない様相が見られる。管理は、隣接敷地に覆いかかる大木の枝落しが2～3年に一度程度行われていることと、樹林内では倒れそうな樹木の撤去だけで、樹林全体としては自然の様相の濃いものとなっている。

自然性の強い樹林の中で異質なものとして、自生種ではないイロハモミジが、高木から実生まで広い範囲に生育している。景観木として導入されたと考えられる。高木の樹形が枝を広げた形であることから判断すると、導入された時期においては、

この樹林はアカマツにイヌシデ、ヤマザクラ、コナラなどの混交する明るい林であったと思われる。現状のように暗い林床となる常緑樹林の中では、イロハモミジは大きく生育したとしても下枝の無い樹形となるからである。

将来的には、墓地全体はタブノキ、ウラジロガシを中心とする常緑広葉樹林として維持されると予測される。懸念があるとすれば、南側の林縁においては、ササの繁茂が見られる。これがさらに繁茂すると、ササの落葉の堆積に妨げられ中高木層構成種の種子の着床が難しくなることと、ササの下の暗さにより実生の生育が妨げられることにより、中高木層構成種の更新が阻害されると思われる。

⑥ 妙応寺

南側の普明院跡地との境界にタブノキなどが帯状に生育する。高さは13~15m、ケヤキ、エノキの落葉樹が混ざる。樹木の足下はモチノキ、ヤブツバキの幼木や、タブノキ、シロダモの実生が生育している。幅はないものの、構成種が極相である常緑広葉樹林の自然性の高い様相を呈している。境界を明確にすることができないことから樹林に手を付けることができない状態で残されている。



図4-6 ⑥妙応寺と普明院の境界林外観

また、本堂東側の墓地は、かつてスギおよびケヤキを中心とした樹林であったが、敷地東側の円光寺との境界を確定しブロック塀を設置することと、墓地の整理に伴い伐採されている。

⑦ 妙泰寺

本堂西側の墓地にスギの樹林が形成されている。高さは12~15m、ケヤキ、タブノキ、カラスザンショウが少し混じる。また、中木としてタブノキが見られる。低木、草本は樹林の中央部にはほとんどないが、林縁部においてシロダモ、タブノキの実生が少しながら生育している。地表は砂地で舗装はされていない。樹林のある墓地は下部を石積みで抑えられた造成平坦部にある。晴天時においても石積みからは湧水が見られた。水分がありながら水はけの良いところとして、樹林の生育場所としては条件が良いと思われる。手を入れなければタブノキの優占する樹林に移行してゆくことが予測される。

⑧ 龍国寺

尾根地形の端部の南側斜面の一部を平坦に造成した敷地を持ち、参道沿い、境内周縁部に大きな樹木が生育している。18~25mの高さのケヤキ、タブノキ、スギなどからなり、金沢市の保存樹林に指定されている。参道は尾根上に沿っており両側にケヤキが列



図4-7 ⑧龍国寺参道の様子

植されている。境内の南側は崖地で特にこの部分にケヤキ、タブノキの大きなものが生育している。中低木にヤブツバキ、の生育が見られたほか、崖の肩にはシロダモの実生があり、この辺りの植生の極相の様相を持っている。崖の中は低木地被の植生はまばらである。崖の下の方には

ササの入り込む様子が見られる。本堂背後にも同じようにケヤキ、タブノキの大きなものが生育しているが、林床の植生はまばらである。

本堂前は砂地でコケが広がる。また、一角にミズキが生育することから土中の水分は高いものと思わ

れる。水はけの良い尾根上の立地ながら水分に恵まれていることと、温度条件に恵まれた南向きの斜面地であることから、樹木の生育にとっては大変良い環境であるといえる。

⑨ 三宝寺

本堂東側の墓地の南側、龍国寺との境界沿いにウラジロガシが13本、列状に生育している。13mの高さがあり、足下にはシロダモ、ヤツデ、タブノキの実生、キツタなど常緑広葉樹林の種が生育し、帯状の樹林を形成している。卯辰山山麓寺院群では、ウラジロガシがまとまって生育している箇所はここだけである。

⑩ 本光寺

本堂東側の北向きの墓地にスギ、ヒノキを中心とした樹林地が広がる。樹林の高さは17～20mあり、タブノキ、イロハモミジ、トガ（コメツガ）、ハンノキが混交している。地表は砂地であり歩行路は舗装されていない。下草や低木は刈り払われ、きれいに管理されている。中木として4mほどの高さのモチノキ、ヤブツバキが全体の10%を覆っている。元々、スギ、ヒノキの人工林であったところにヤブツバキ、タブノキなどの自生種が入り込み、現状の様子となったことが観察できる。

北側境界にはケヤキとタブノキが列状に生育し、ヤブツバキがその下を覆っている。境界木付近が帯状の樹林地となっている顕著な例である。同じ敷地にこのような部分もあり、樹林の広がる墓地は砂地であることから、自然の種の侵入は続くことが予測され、いずれはタブノキの林となると考えられる。

⑪ 全性寺

北側墓地の東側境界沿いにタブノキの生育が見られる。高さは14mではあるが、幹周は2.4mあり、比較的大きな樹木である。西側墓地内はスギ林となっている。高さ17m、幹周は1.5m内外のものが数本生育している。

⑫ 蓮覚寺

墓地の東側境界にタブノキが数本生育している。高さは13mあり、量的に小さいながらも全性寺のタブノキとともに、帯状の樹林を形成している。

⑬ 心蓮社

西向きの斜面を段々に造成した墓地部分にタブノキを中心とした樹林が広がる。金沢市の保存樹林に指定されている。高木の高さは10～20mあり、タブノキに混じってケヤキ、スギ、ヒノキ、イロハモミジが生育する。樹冠は連続しており、林内は暗い様相を呈している。その中で中木はヤブツバキが見られる。段々造成の柵部分はアスファルトやコンクリート舗装の歩行路に沿って墓石が並んで設置されている。これら段々間の斜面部分は土のままの造成斜面であり、この土の部分に樹木が生育している。ここにはタブ、シロダモ、ヤブツバキの実生が多く、緑被率は高くないがミツバ、シダやコケの生育が見られる。土中の水分の高さを示すものであり、水分がありながら停滞しにくい斜面地形とともに樹木の生育条件としては良好なものといえる。

庭園部分に近い箇所にツクバネガシの大きなものが生育している。自然植生としては北限にあたるものであり、貴重な存在といえる。

高木の様相は、この辺りの気候における極相といえるものであり、現状ではタブノキの枝が積雪などで折れて、連続した樹冠に空白ができると、周囲の枝が伸びてこれを塞ぐといった様子が観察されてい



図4-8 ⑬心蓮社墓地内樹林の様相

る。墓地内は中低木が刈られて、きれいに管理されており、中木、低木の後継種は育っていない。

⑭ 光覚寺

北斜面の墓地部分に広がる樹林地である。造成小段の残りの斜面部分と、園路舗装から取り残された隙間の土部分にイロハモミジ、タブノキ、スギ、ケヤキが生育する。樹林を構成する樹木の80%はイロハモミジで、高さ10m前後である。高木の高いものはケヤキの17mのものが見られる。樹冠は連続しており90%が緑被されている。樹林が覆う墓地の大部分では、中低木や下草は、造園的な修景種を除いて刈り取られており、樹冠の下は見通しの良い様相を見せている。高木の多くが落葉樹で明るい緑のイロハモミジであることと、中低木の少ない様相から、樹冠に覆われていながら明るい樹林となっている。樹林の北東角は竹林であり、その周りにはユズリハの中木、ケヤキやシロダモの実生の生育が見られる。自然性の高い箇所である。

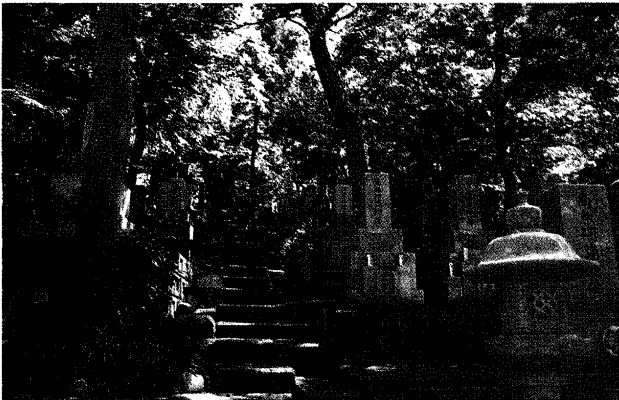


図4-9 ⑭光覚寺墓地内樹林の様相

樹林は本堂座敷裏の庭園の背景として、本山である京都の永観堂に倣いイロハモミジを多く植栽しているということであり、人工林である。そこに自生種であるタブノキが入り込んでいる特徴的な樹林である。紅葉山の形態は、座敷および庭園空間と連続するものであり、今後もこの形態が維持されると思われる。また、管理方針が変わり管理が手薄となった場合はタブノキを主とした暗い樹林となることが

予測できる。

⑮ 善導寺

本堂東側の墓地との境の斜面地にケヤキ、スダジイの大きなものが混じった竹林が生育する。タケが撤去されれば、広葉樹の種の生育が期待できる。

墓地北側の斜面地には、高さ10m程度のケヤキが列状に生育している。低木には常緑樹林の種の生育が見られるものの、高さ4m程度のサクラがケヤキの間に植栽されており、人為的な様相を見せている。また墓地南側には、高さ10m程度のタブノキが数本生育している。墓地全体はコンクリートおよび砂利で造成されており、景観的には現状のような様相が維持されるか、あるいは樹木の少ない様相へと変化すると予測される。

5. 樹林の将来形

面的に樹林の広がっている墓地は、寺院経営のために今後は整理される機会が増えると予想できる。その整理の際の造成に伴い樹林は減少することとなる。一部分が残されるとすれば、急な斜面や明確となっていない敷地境界付近において帯状の樹林が残されると思われる。また現状の帯状の樹林は、この形態が維持されることが予想される。敷地境界部分に生育するものにおいては、これまで明らかになっていない境界は、今後においてもしばらくの間は曖昧なままであり、樹林に手を付けることは難しいと考えられる。これらから地域全体としては、帯状の樹林が断片的に生育する様相を呈してゆくと予測できる。

帯状の樹林の特徴は、面的な広がりを持つ樹林と同じような構成種を持ちながら、幅が小さいことで林内という環境の量が少ない点である。林縁部がほとんどを占める。林縁部は林内と異なり横方向からの光量が有り、生育する植物種が多い。また林外と接していることで、空気の滞留する林内に比べ乾燥しており、人為影響を受けやすい。これらの状態は生育種間の競争が激しく、変化の多い環境条件であることを示している。樹林の高木を形成する種の幼

木にとって、林内にくらべ厳しい生育環境であるといえる。現状で生育する高木が枯死したりした場合、後継木が育ちにくい環境にあるといえる。しかしながら、剪定管理など的人為的な圧力が小さく、周囲に未舗装の部分が広がっていれば、帯状の樹林は徐々に幅を広げ、林内環境を持つことになる。高木種の生育が期待でき、面的な樹林へと移行することが期待できる。樹林単体で見れば、衰退する過程にあるといえるが、卯辰山山麓に立地することで、山腹に生育する樹林からの種子の供給もあり、現状を維持していると考えられる。市街地における自然性のストックヤードとして機能している。

樹林が地域に生育することで、景観の向上、環境保全、防災、レクリエーション空間の提供などの機能を住民は享受することができる。これらの機能は樹林の量が多いほど、また連続性が強いほど高まるものである。落葉の処理などの迷惑要因を持ちながらも、住民からは地域の特徴として寺院の樹林が存在することが重要と認識されている。保全のためには、現状の面的な樹林を減らさないことと、点在する樹林をつなぐ林分の形成が必要である。減らさない方策としては保存樹林の指定が行われており、今後も保存樹林を増やすことが効果的と考える。連続性を生み出す新たな樹林の形成としては、地域の人口が減り空地が増えている現状の中、これらの土地のうち連続性を形成する要点となるものを都市緑地として、樹林に育成することが考えられる。また、新たな緑地保全法のもと、地域を緑地保全地区とすることも樹林の保全や形成に役立つと考えられる。

帯状の樹林が連続することで人為的な都市空間とは長い縁辺で接することとなる。人為圧の大小により、場所ごとに様々な様相を示すと考えられる。将来的に広い面積の樹林を形成できる潜在能力を備えた樹林が、多様な面を持ちながら地域に広がって生育することで、寺院境内と一体となった特徴ある都市環境が、この地域に形成されることが期待できる。

6. さいごに

市内には3つの寺院群があり、多くの寺院が敷地内に生育する樹林を持っている。卯辰山山麓寺院群は卯辰山の樹林、小立野寺院群は浅野川の河岸段丘斜面緑地、寺町寺院群は犀川の河岸段丘斜面緑地にそれぞれ接している。つまり金沢市内の寺院群の緑地は、どれも里山、奥山に連続しているものである。都市の内部に広がる緑地として質の高いものといえる。それらの変遷については、10年後、20年後の調査により地域の資産としての緑地の様子を見守っていくことが必要であると考えられる。

現地調査および調査結果整理においては、下記の方々の御協力があり、本文をまとめるにいたしました。心より感謝申し上げます。

- ・ 樹林調査参加者御氏名（五十音順、敬称略）
泉谷昌美、上田哲男、岡崎俊樹、岡田幹彦、
中谷裕一郎、宮本陽助、本光章一、吉川久則、
割田勉

(つば・たかひろ ランドスケープ/アーキテクチュア)
(2006年10月31日受理)